AMCoR
Asahikawa Medical College Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

日本整形外科学会雑誌 (2006.03) ８０巻３号:６６ページ.

腰椎固定術後10年以上経過例における隣接椎間変性の検討

佐藤達也, 小林徹也, 熱田裕司, 恒川博巳, 松野丈夫

1-J-4

腰椎固定術後10年以上経過例における隣接椎間変性の検討

佐藤 達也　小林 徹也　熱田 裕司　恒川 博巳
松野 丈夫

【緒言】脊椎固定に伴う隣接椎間変性は術後成績に影響し，長期の経過観察が必要である．本報告は腰椎固定術後の隣接椎間変性の発生に関わる因子を検討することを目的とした．

【対象】腰椎固定術後10年以上経過観察可能であった26名(男性10例，女性16例)を対象とし，術後，最終観察時のX線を用いて固定椎の隣接上位2椎間と下位1椎間の椎間変性を調査した．調査項目は隣接椎間の椎間板角(上下終板のなす角)と，椎間板高(前方後方椎間高の和)，骨棘長(椎間上下の和)とし，椎間板高，骨棘長は椎体径で標準化した．隣接椎間変性の定義として，1)椎間板角5°以上の後弯化，2)椎間板高10 mm以上の減少，3)骨棘長5 mm以上の増長，の3項目とも満たしたものを変性ありとした．腰椎前弯角(L1-5)，仙骨傾斜角(仙骨上終板と水平線のなす角)を計測し，Kobayashiら(Spine 2004)の定義に従い，腰椎前弯角が仙骨傾斜角の70-90%の大きさである場合は至適な腰仙椎アライメントとした．

【結果】手術時年齢，観察期間は各々平均58.3歳，15.3年(10-21年)であった．最終観察時のX線にて隣接椎間変性を30.8%に認め，1椎間上位の隣接椎間に多い傾向であった．Cox比例ハザード検定を行った結果，隣接椎間変性の発生は，術後の腰仙椎アライメントと有意に関係したが(変性発生率＝至適例20.0%：非至適例37.5%，p＝0.0364)，年齢，手術方法，脊椎instrumentationの有無，固定椎間数，腰仙椎固定は関係なかった．

【考察】腰椎固定術後の腰仙椎アライメントが至適であったものでは，隣接椎間変性の発生が有意に少ない結果であり，症例毎の適切なアライメント獲得の重要性が示唆された．

【結語】腰椎固定術後平均15年のX線成績を調査した．術後の腰仙椎アライメントは隣接椎間変性の発生と関係した重要な因子であった．

旭川医大整形